

日本人のみた外国 シベリアの蚊 (カルチャー・シ ョック)

著者	原島 梓
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	123
ページ	53-53
発行年	2005-12
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00005583

シベリアの蚊

原島 梓

ソ連が崩壊した直後のことである。ひよんなことから、真夏のアムール川を一週間、手漕ぎのカッターボートで川下りすることになった。「川下り」と言う、「川の流れる身を任せ、昼寝でもしているのか」と思いうかもしれないが、アムール川の水の流れは非常に遅く、オールで漕がない限り前には進まない。風が吹けば帆を張って進めるのだが、残念ながら微風たりとも吹いてはこなかった。結局、四〇度近い気温の中、直射日光を浴びながら、無人の草原や森林の中を一週間、朝から夕方までひたすら漕ぎ続けた。オールの重みで掌の豆はすぐに潰れ、目的地に到達する頃には、ごつごつとした強い掌に変わってしまった。

ただ日中よりもつらいのが、夕方になると必ず襲ってくる蚊や蛇、蝨の大群だった。毎夕適当な中洲にボートを着けテントを張るのだが、岸に着いた途端、まるで真っ黒なカーテンのように大群になって襲ってくる。

こちらもおめおめと敵に負けてはいられない。長袖長スポンの上に、長袖長スポンのビニール製の雨合羽を着て、帽子を被り、顔には防虫ネット、手には軍手、腰には携帯蚊取り線香。虫除けスプレーを互いに吹きつけ合うだけでなく、あちらこちらで火

を燃やし煙で追い払おうとする。だが敵も負けてはいない。大群となって私達を襲撃し、ビニール製の雨合羽をもろともせず、上からどんどん刺してくる。最初は叩いたり追い払ったりしているものの、敵の数の多さにだんだんと交戦する気力も失せる。一夜にして刺された箇所は百カ所以上、という日も少なくはない。次第にこちらもこの環境に順応(?)し、刺されたときの感覚で、蛇か蝨かを判別する能力も備わった。その上、蝨に刺されたときのつねられるような痛みが快感になり、特に耳を刺されたときの痛みがやみつきになってしまった。とはいえこの旅が終わったとき、全身くまなく赤く腫れあがり、見るも無残な姿となり、互いの姿を見て苦笑するしかなかった。

毎夕、敵の襲撃を受けているうちに、私はシベリアの蚊の二つの特徴に気付いた。一つは、シベリアの蚊はロシア人と日本人を区別しているということである。私を含め日本人は、毎夕、完全防備で挑んでいたが、同行のロシア人は、昼間と同様、半袖半ズボンを出で立ちだした。敵が来ても手で追い払うだけ。しかし刺された数は、日本人よりも極端に少なかった。体質の違いなのか、あるいは普段接することがない日本人に蚊が好奇心を抱いたのか、それとも

完全防備の私達を見てより蚊が好戦的になったのか、その理由はわからないが、明らかに蚊はロシア人と日本人を区別していた。二つ目の特徴は、シベリアの蚊は非常に礼儀正しいということである。日本の蚊は日中でも夜でも襲撃してくるが、シベリアの蚊は夕方のある一定の時間のみ現れ、それを過ぎるとすぐ引上げていく。日本では、夜中に蚊の襲撃で安眠を妨げられることも多いが、シベリアではそのようなことはない。夕方の一定の時間さへ我慢すれば良いので、なんとか耐え得ることができるとも、もともと、あんなに多くの蚊に終日襲撃され続けたら、気が狂ってしまうだろうが。

たった一週間の川下りだったが、毎夕蚊に血を吸い取られ、連日の船漕ぎで体力を使い果たし、体重は五キロ減少した。あいにく体重はすぐに元に戻ったが、蚊や蛇に刺された痕が消えるまでには五年かかった。しかし現在では、あれほど苦労した同じ行程を、ホバークラフトがたった五時間で下りきるといふ。もうあの蚊の大群を体験することもないのかと思うと、一抹の寂寥感を覚えるのは私だけだろうか。

(はらしま あずさ/アジア経済研究所
地域研究センター)